

## 単元を貫く問いに協働的に向き合いながら、 歴史的事象を統合する概念を理解する

岩手県立盛岡第三高校 古川 剣士 はやと

私が考える中核的な概念

個別の歴史的事象を  
貫く概念を理解させたい

中核的な概念とは、個別の知識を統合的に理解するための主要な概念であり、知識を活用して思考・判断・表現等を行っていくために欠かせないものです。日本史においては、政治・経済・社会・外交・文化という5領域における個別の歴史的事象を貫く概念が中核的な概念にあたり、私は考えています。例えば「織豊政権」の単元では、「時代性・政治の転換」を中核的な概念として生徒に理解してもらえ、このように授業計画を立てました。中世から近世へと移り変わる中、織田政権、豊臣政権がどのように新しい時代を構想し、どのような政策でそれを実現しようとしたのかを理解し、自分の言葉で話れるようになることで、その後の徳川政権

にどうつながっていくのかを含め、ほかの時代の時代性や政治の転換についても歴史的に思考しようとする力を身につけてほしいと考えました。

中核的な概念は、個別の事象だけでは理解しにくく、単元を貫く問いを通して理解したり、ほかの単元を学ぶ際にそれまでの単元の学習で獲得してきた知識を活用することで補強されたりするものです。さらに、他者との学びを通じて、1つの歴史的事象に対しても自分とは異なる捉え方や表現の仕方があることを知ることで、生徒は個別の歴史的事象を抽象度の高い概念として理解していきます。そのため、私の授業では、整理したことや理解したことを他者と共有しながら深化させていくプロセスを大切にしています。生徒一人ひとりが個別の歴史的事象の理解を教室内で持ち寄ることで、個別の歴史的事象の理解を超えた大きな概念の理解がもたらされるといふことを生

徒が実感することを願いながら、日々授業を行っています。

授業デザインの観点・工夫

協働的な学びを通して  
単元を貫く問いに迫る

4コマの構成とした「織豊政権」の単元の1コマ目では、中学校までに学んだ知識を基に、「いつ、どこで、誰が、何を、なぜ、どのように」という5W1Hや、政治・経済・社会・外交・文化の5領域の視点で、日本の近世史の全体像と西洋及び中国の動向を概観しました。単元の最初にマクロの視点で歴史を通観するのは、生徒に「歴史は人名や年号を覚えればよい」といった思い込みから脱却して授業に臨んでもらうためです。その後、「時代の転換はどのようにして起きるのか」という問いを単元を貫く問いと



ふるかわ・はやと

同校に赴任して5年目。地理歴史科（日本史）。2026年4月より東京大学大学院教育学研究科に所属。

### 学校概要

- ◎ 設立 1963（昭和38）年
- ◎ 形態 全日制／普通科／共学
- ◎ 生徒数 1学年約280人
- ◎ 2024年度卒業生進路実績 国立大は、岩手大、東北大、埼玉大、千葉大、横浜国立大、神戸大、東京都立大、横浜市立大などに169人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ218人が合格。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

「中核的な概念」の理解が深まる 授業デザイン

単元の概要

【対象】2年生 【教科・科目】地理  
歴史・日本史探究 【単元】織豊政権  
【単元目標】時代（近世）の転換につ  
いて、織豊政権の確立を軸に考える。

●本単元で理解してほしい中核的な概念 時代性・織豊政権（政治）。

●中核的な概念の理解を通じて育成したい資質・能力

- 多様な知識、概念を組み合わせて物事を考える力。
- 長いプロセスで物事を考えることができる力。
- 教科書や資料集、そして他者との対話から学んだことを自分の言葉で語る力。
- 他者と対話し、自分と異なる視点に触れながら最適解を模索する協働的な姿勢。

時数	学習目標	授業内容
1	「近世への転換と同時期の世界の動向」を本時のテーマに、大局的に近世という歴史をつかむことができるようになる。その上で、「時代の転換」（時代性）という概念（中核的な概念）が本単元だけではなく、以降の単元においても考える軸として機能していくことを理解する。	新しい部（近世）・章（近世の幕開け）・単元（織豊政権）に移行することに伴い、中世（末）の戦国時代との差異に着目させ、どのような変化がもたらされたのかについて、本単元で学んでいくことを踏まえてもらう（歴史的な見方・考え方を用いて変化を追究していく）。流れは、日本近世史の全体を「5W1H」や「5領域」（政治・経済・社会・外交・文化）の視点で概観した後、世界（中国やヨーロッパ）の動向について学ぶ。
2	「織豊政権の確立」を本時のテーマに、信長と秀吉がどのように新たな時代を構想し、実現していこうとしたのか、ペアまたはグループで思考することができる。	中核的な概念の深い理解に迫るために、授業内で学習者（生徒）と教師が相互に対話し、「問いの構造化」を図ることを主眼とする。本テーマに対して仮説を個人で立て、クラスで共有し、それに基づいて織豊政権についてのワークシートに取り組む。知識を整理した後、ペアまたはグループで織田政権と豊臣政権に分かれてその特徴を調べ、両政権が最終的にどのような時代を構想し、実現していこうとしたのか、為政者としてのあり方や時代の転換について考えてみる。
3	「豊臣政権の展開Ⅰ（大陸侵攻前）」を本時のテーマに、秀吉の諸政策が近世日本社会の基盤を築いたことを理解し、時代の変化の様相をつかむことができる。	東京大学の入試問題（2009年度入試前期日程）の日本史・第2問を基に、豊臣政権が具体的にどのような新たな日本社会を構築していこうとしたのかを考察する。
4	「豊臣政権の展開Ⅱ（大陸侵攻期）」を学んだ後、今までの学び（上記1～3）を踏まえて「単元のまとめ」（＝単元を貫く問いを解決する学習活動）を行う。	全国統一後の豊臣政権（豊臣秀吉）が、アジア進出を企てた理由を考察する。授業後半は、上記1～3の学びを接続しながら（織豊政権を軸に）、「時代の転換（時代性）」、すなわち中世から近世への転換＝戦国時代の終焉について考察する。

※学校資料を基に編集部で作成。

お  
勧  
め  
の  
分  
享

管  
理  
職

教  
務  
担  
当

進  
路  
担  
当

担  
任

して設定し、その問いに対する答えの仮説を立てさせました。

2コマ目では、織田信長と豊臣秀吉が新たな時代をどのように構想し、実現していこうとしたのかを考えさせました。ペアで前時の学習内容を振り返ってから、織田信長、豊臣秀吉はどのようなことを行ったのか、中学校までに学んだ内容を共有しました。そして、「両者の登場によって、なぜ戦国時代は終わったのか」という本時の問いを示しました。

本時の問いに迫る一歩として、生徒は教科書や資料集で歴史的事実を個人で整理し、ワークシート（P.3図）を用いて問いに対する答えの仮説を立て、ペアで検証しました。「傑出した人物だったからではないか」「下剋上が起きないように周りの力を弱めたからではないか」など、生徒は様々な仮説を立てました。そして、生徒は私とやり取りする中で、織田政権と豊臣政権の共通点であり、時代が変わる背景と考えられるものとして、信長による安土城、秀吉による大阪城、聚楽第といった「城の築造」と、信長と室町幕府、秀吉と朝廷における融和関係から見て取れる「伝統的な権威」に着目しました。授業の終盤には、城を造ったこと、伝統的な権威を利用したことを踏まえて本時の問いに対する仮説を、個人、さらにグループでまとめ、それを全



年度当初は他者の意見に引っ張られていた生徒も、協働的な学びを続ける中で、他者の考えを取り入れながら自分の考えを深められるようになっていった。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

体で共有し、授業を終えました。

3コマ目では、豊臣政権の政策が近世日本をどのように形作っていったのかを考えた後、東京大学の2009年度入試前期日程の日本史の問題に取り組みました。そこでは、豊臣政権がどのように戦乱の世を統一し、政策を正当化して諸大名を従えたのかを考察する中で、生徒は秀吉が朝廷の意思を奉じながら、「御恩と奉公」の関係、つまり封建制という従来の統治体制を改良しながら新たな時代をつくっていったことを理解しました。

本単元の最後の4コマ目では、中世と近世の連続性や断絶、そして「あなたなら織豊政権をどう評価するか」という問いを統合的に考察し、「時代性・政治の転換」という中核的な概念の理解につな

げました。生徒は後の単元で、豊臣政権の「幕府と御家人（個人）」という関係から、徳川政権の「幕府と藩（組織）」という関係に封建制のあり方が変化することを学ぶ中で、「時代性・政治の転換」という中核的な概念をより深く理解し、転移可能なものとして身につけていきます。そのため、例えば現代の政治に結びつけて考える生徒もいます。

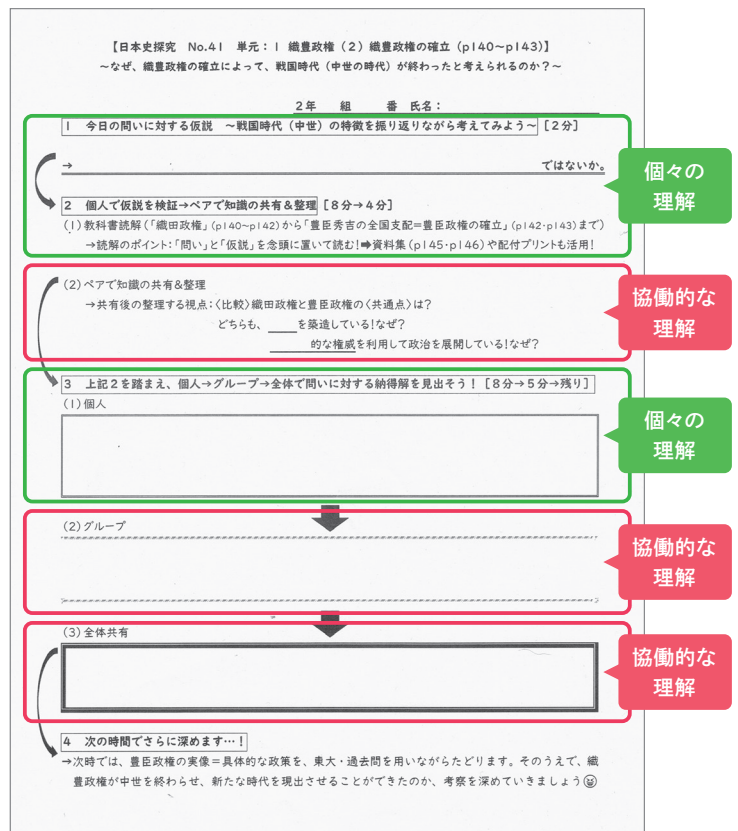
成果と展望

他者との対話の成果を生かし、歴史を論理的に語る生徒たち

歴史的事象を列挙することができるといっただけでは、中核的な概念を理解し活用しているとは言えません。各事象が持つ意味や、事象間の関係を複数の時代や政治などの比較や関連を通して見いだすことができ初めて、中核的な概念の理解や活用に結びつくと考えられています。「日本史探究」の場合、時代や世紀など、幅広い時間軸で政治や経済を語る事ができる生徒が2年次3学期くらいから現れ始めます。その度に、中核的な概念の理解には相応の時間がかかるものだと実感します。

私の授業は、個人で思考する時間、ペアやグループでの対話を通して自分の考

図 個々の理解と協働的な理解を行き来する「日本史探究」のワークシート



※学校資料を基に編集部で作成。

えを深める時間、他者とともに最適解を模索する時間で構成しています。そのため、自分の意見を表現するだけでなく、他者の考えを受け止めたり、他者が考えを表現することを手助けしたりすることをも求められます。例えばペアの相手があく意見と言えない時に「もしかするとこの人は、私が気づいていない大切なことに既に気づいているのではないか」「この人の考えをしっかりと受け止めよう」といった態度で他者と向き合うことは、日本史という科目の枠を超えて、これか

らの社会で求められる資質の1つである「市民性（シティズンシップ）」の形成と涵養に資すると考えています。

そうしたかいてもあって、定期考査の論述問題の解答などでは、「私はこう考えるけど、確かにこういふ（他者の）意見もあるかもしれない。しかし私は……」といったように、他者の考えを踏まながら論理を構築し、文章で表現できる生徒が増えています。そうした変化からも、中核的な概念の理解が思考の幅を拡張させることを実感しています。